



「ローマ字の父」

「日本式つづり」を考案

5月20日は「ローマ字の日」である。

歴史は古く、日本の「ローマ字の父」と称される田中館愛橘の没後3年に当たる1955（昭和30）年に制定された。命日は21日だが、きりのいい20日にしたという。

現在、ローマ字（訓令式と呼ばれる）学習を始めるのは、小学4年から3年になった。パソコン時代、キーボード入力を早くから覚えるようにするためだとされる。

ローマ字はラテン語を表記する文字だった。外国人が日本語を写すために母国語のつづりと発音を援用したから、ポルトガル式やドイツ式など数種

のローマ字が生まれた。

ところが、明治の文明開化で英語が普及すると、英語式、つまりヘボン式を広める運動が起こる。1884（明治17）年、「羅馬学会」が始めたのだ。山川健次郎ら海外留学組の東大教授らが中心となった。列強に追いつこうと急速に西洋化を進めた鹿鳴館時代、日本のローマ字運動が大きく動きだした。

しかしこれに敢然と異議を唱えた一人の人物がいた。東大で山川らに学び、助教教授になって間もない田中館だった。それには理由があった。田中館が78（明治11）年に東大物理学科1期生として入学したころ、物理学教師ユーイングはローマ字書き日本語を逆さ読みしてフォノグラフに記録。それを逆回しして、本当の言葉を出させる実験をし、日本語の音韻学的研究を始めていた。

田中館は最新の実験と理論によって、日本語とローマ字の表記法に強い信念を抱いたのだ。田中館は音韻学の



日本式ローマ字で書かれた田中館愛橘の墓＝福岡

立場から五十音図に基づいた「日本式つづり」を考案した。日本式の命名者は、弟子の田丸卓郎である。

85（明治18）年に『理学会雑誌』に意見を発表、翌月は「発音考」を、さらに12月に総会へ対案を提出し、ヘボン式反対の行動を起こした。29歳、恩師教授らに真っ向から逆らった田中館助教教授だった。海外出張22回、国際学会出席68回の経歴は、日本語の国際化への思いと、日本式ローマ字への確信をより強固なものとした。論争は半世紀続いたが1937（昭

和12）年、内閣が交付した「国語のローマ字綴方統一」（訓令式）こそ大筋が田中館の考案した日本式であり、現在の教科書で学ぶローマ字だ。

ローマ字といえば田中館、田中館といえばローマ字、田中館は47（昭和22）年、最後の貴族院でもローマ字の演説をした。

（菅原孝平＝田中館愛橘会副会長、二戸歴史民俗資料館長）

【ミニコラム】 早くに価値知り活動

八戸ローマ字会

「世に広く国字ローマ字広めつつ いや栄えます日の本の国」。これは“ローマ字の母”と言われる八戸の北村千代子（本名ちよ）が詠んだ歌だ。北村は田中館愛橘の親戚に当たり、1924（大正13）年、「八戸ローマ字会」を結成し、普及活動に奔走した。早くにローマ字の価値を知り、その普及活動に半生をささげた生き方は、小学校の国語の教科書にも紹介された。